

主義久の頃後に金に金にいとかうがうしく見ゆ、登山の輩是を拜し奉る。山上には社壇本外に添立給ふ。いとかうがうしく見ゆ、登山の輩是を拜し奉る。山上には社間々又火大に燃出て、くろ煙天を覆ひ、磐石を數里に飛事あり、是を神火と稱し、諸州ことに恐れ拜すとかや。山嶽海岸に臨んで南をうく、霧島の明神は山下に鎮座します、祠方三間計、鳥居物ふり、樹木しげり、尤神さびたる靈地なりとぞ、肥州長崎の人也。

賢按當時延岡領に高千穂山あり、霧島とは方角違なり、不審、總體地理不案内の者の物語は、まゝ如此事あり、能々改見度事也、追而委舗可尋。

〔西遊雜記三〕霧島山は九州第一の深山にて、幽谷嶮岨限りをゑる人まれにて、山奥肥後の米良山につゝき、南大隅に跨り、數十里に連りし山也。高山とは稱しがたき山にて、布地廣大也。當山躊躇の木數多にして、花の頃は谷々峯々、猩々緋にて包しごとく、山一面に赤く、朝日夕日には其光りにゑいじて、詠め何とたとへん方なし、春の頃を盛りとし、それより殘花となりても、此山のつゝじは夏まで咲谷あり、上方筋にてきり島と稱せる躊躇の木も、此山の名を付しものにて、色赤しといへども、土地のよしあしによりてや、當山の躊躇の色は、誠に緋のごとく、類すべきものにあらず、東霧島村と西さりしま村とは、曲り道とは言ながらも、行程凡六里餘、西北は都て霧島山にて、谷々麓をめぐりて、小村多く、各山の稱名かはるといへども、總名はきりしまといふ、海内世の人の思ふとは案外にて、中華にもさして劣らぬ程なる廣大なる事にて、かゝる山も有事也、扱此山奥嶮岨の峯、神代に建給ひし天の逆鉢と稱せる數丈の鉢、巖石の上に逆しまにたて、神代の文字にて銘をほりてあるといふ事、昔しより云事にて、誰壹人其所に行て見しといふものなし、京都橘石見介といふ人伊勢國久居人故ありて此地に下り、逆鉢の建有る峯に行見しといふ、九州の紀行あり、予是を一見せしに、人家を離るゝ事十餘里計、谷に下り峯を越へて行に硫黃の燃る谷もあり、煙り爰かしこに立上りて、道を埋み行迷ふ所もあり、刃の上を傳ふやう成岩の上を腹這して